涸沢

毎日新聞旅行　　3~5 日

2019 年以来 2 年ぶりの涸沢である。北アルプスに行くといってもこのあたりまでが精一杯となってしまった。しかもこの 2 泊 3 日はけっこう疲れた。

ツアーリーダーは山岳ガイド業の石島竜平さん。きれいに整えられたあご髭とイケメンで、さぞ女の子の胸をときめかしたことであろうと思わせるが、薬指のリングがそれを縛り付ける。まいたびのツアーコンダクターは、子育て終了くらいと思われる吉岡さんがメインでサブはマイタビ最若年で 24 歳の根本さん。されどジジババに対しても行動の指示をするときには全く物怖じすることも無く堂々としていた。

メンバーはジジイが 5 名で、少し若い人を含むババアが 12 名。一組カップルもいた。奇しくも 2019 年と同じ構成である。

初日は上高地から徳沢までである。明神までは梓川の左歩道を歩く。イワナの子供と思える魚がいる。石島さんに何の魚ですか?と聞いたら、“イワナかヤマメでしょうね。”と俺でも応えられるようなことを言っていた。魚は得意では無さそうであるが、上高地の地形生成の話とかブラタモリの時間みたいであった。徳沢園の宿賃の方が高いのかと思っていたら、石島さんの話では同額とのこと。2 段ベッドであり、食事もフランス料理風の夕食といいなかなかケッコウであった。この辺りは外国のリゾート地を意識したものではないかと思われる。今回は酒を飲む人は少ないようで、風呂上りに生ビールを飲んで、夕食時に日本酒を飲んでいたのは俺だけだった。

この日の歩行計数値は 17,139

涸沢小屋

河童橋

2 日目は今回のメーンイベントで徳沢から涸沢までで標高差 782m。多少の登りはあるが、この程度であれば山登りとしてはチョロイものであるが、今の俺にはしっかり覚悟を決めて歩かねばならない。本谷橋まではまだ緩い登りであり、その先は傾斜が少し急になる。ここで遅れるジイサマが出た。立派な

カメラケースを抱えているので、高く言ったつもりで“30 万位しますか?”と聞いたら“88 万です”との答えであった。ただし自分の荷物もガイドに持ってもらうくらいであるので、シャッターを押す姿はついに見なかった。緊急事態宣言が解けたためか意外と人が多かった。すれ違いや追い抜きなどのための待ち時間が多くなった。石島さんの提案で、速いさん組と遅いさん組に分けることとなり、当然遅いさん組に入った。秋の涸沢に来るのはもちろん紅葉を愛でることにある

本谷橋

涸沢近くの紅葉

のであるが、ここの紅葉は黄色が中心である。私はどちらかというとチングルマなどの赤を中心にした紅葉が好みであるので少し残念である。涸沢小屋に着くとほとんどは散策に出かけたが、前回の散策が 2 時間近くに及ぶハンパないものであったので、まずは缶ビールとした。今回はこの辺一帯に地震があったので1時間程度で皆さん戻ってきた。石島さんやまいたびのスタッフと一杯1000円の生ビールとした。この日の歩行数は 19,569 歩。2005 年の 61 歳の時に涸沢でテントで寝てみたいと思ってテントを持ち上げたことがある。当然 1 日目は上高地から涸沢である。2 日目は奥穂に登ってその日のうちにテントを横尾に移して、翌日は槍に登り、さらにその翌日は蝶が岳であった。あの頃は自分の体力が衰えるなん

涸沢のテント村

てことを考えたことも無かった。

この日もテント村は色とりどりに輝いていた。かつて自分もあの中にいたのだということも信じられない。

3 日目は上高地まで降るだけ。歩行数は 31,761 歩であった。

夜のテント村

ジジイの中に一人面白い人がいた。75 歳前後と思われるが、50 歳を過ぎたころに糖尿病と診断されて山登りを始めたということである。糖尿病にしてはやせ形である。むしろこの方が糖尿病としてはヤバイという話を聞いたことがある。日本にある 22 座の 3,000m 以上の山を全部登るのが目標であるという。すでに 21 座を登り、残すは南アルプスの聖岳のみという。今回の歩き方を見ていると、私なんかよりはるかに余裕で歩いているので、“聖岳くらい大丈夫ですよ”と言うと自信がないと言う。かつて塩見岳から北岳へ抜けるツアーに参加した際に、歩行困難になってしまった経験を持って以来自信喪失したみたいだ。石島さんにプライベートガイドの依頼をしていた。ガイド料は 1 日 30,000 円＋交通費＋その他経費ということである。彼は 300,000 円は予算を取っているという。すごい熱意だ。